



3月24日(金)、在リヨン領事事務所・サンテティエンヌ市・同シテ・デュ・デザイン三者の初の共催で《Journée Japon / 日本デー》と題し、日本をテーマにした経済会議、カクテルレセプション、第10回サンテティエンヌ国際デザインビエンナーレ(*)の視察等を実施しました。((*)第10回サンテティエンヌ国際デザインビエンナーレは、「Working Promesse, les mutations du travail」というテーマのもと、3月9日から4月9日まで開催中。



(写真上:ガエル・ペルドゥリオー市長が、市庁舎前で出迎えて下さいました。)

経済会議 « Rencontres économiques internationales - Les nouvelles formes de partenariats franco-japonais / 新たな日仏パートナーシップのあり方 » では、日仏企業の新たなパートナーシップというテーマのもと、当地で活躍する日系企業、また新たなビジネスモデルを作り出している日仏企業にスポットライトをあてました。前半では、ガエル・ペルドゥリオー市長の挨拶に続き、小林所長が日仏文化・経済関係というテーマで、両国の歴史的関係から現在・未来の関係まで俯瞰し、日本人とフランス人の共通点や差異を踏まえた付き合い方について基調講演を行いました。



リヨン商工会議所国際部日本担当 北濱亜也氏、JETRO リヨンコレスポンデント 門元美樹氏による、日本市場への様々なアプローチ方法、日本進出支援プログラムについての紹介の後、後半のラウンドテーブル・ディスカッションでは、北濱氏の司会で、現場の視点に立った日仏産業協力のあり方やその実態、様々な問題点、また成功経験等について、日仏企業を代表する4人の経営者による活発な意見交換が行われました。業種も立場も異なる4名ですが、日仏交流を通じて相互に刺激・補完し合える関係を築くことの大切さに関しては意見が一致し、そのような相互補完関係こそがこれからの未来を切り開くという意見が述べられました。



(写真左から:リヨン商工会議所国際部日本担当 北濱亜也氏、ガエトン・デュキュルティ氏(gérant, Saisons du Mont Pilat, Maison Duculty)、石塚裕氏(gérant, Dyshow Industrie)、アラン・ソワ氏(gérant, AS-MECA-BERNARD)、甲斐洋一氏(Head of Operations, Primetals Technologies France))



ラウンドテーブル・ディスカッションの後半は日仏の仕事の習慣の違いやそれに対するマネジメントのあり方に話が及び、会場の聴衆とパネリスト双方から、「こんなに話が面白いのに、時間が足りないのは惜しい」と声が上がった程でした。

当日は、パネリスト参加企業の紹介テーブルを会場に設置することにより、企業活動の紹介に役立てて頂きました。



会議終了後は、日仏交流を記念した紅白のテーブルクロスや桜の枝をあしらったブーケの演出で、日仏両国の料理と飲み物を用意したカクテルレセプションが実施されました。お客様は、パネリストや関係者と歓談しながら、日仏の味のコラボレーションを味わいました。





午後は、化粧直しを終えたばかりの市庁舎をあとにし、シテデュデザインのアンドロ・フラン氏国際担当部長の案内で、第10回サンテティエヌ国際デザインビエンナーレ視察が実施されました。今年、ユネスコ創造都市ネットワーク参加都市である名古屋市から4組12名のクリエイター、アーティストが参加しており、視察プログラムではアーティストの方たち数名と会うことも出来ました。(写真最上列右:サンテティエヌ市国際担当副市長、コ・ワーキングスペース「Our République」をプロデュースした木村宗一郎氏と。二段目左:「Coucou. Je suis revenu.」展)



(写真最下列右および次ページ:La Maison du Passementier « Textiles croisés » 展(サンジャンボンヌフォン市)にて。左からアーティストのエレン・ジョスペ氏、パトリス・コルテ第一助役、ドゥニ・シャンブ サンテティエヌ市国際担当副市長)



(写真右:米山より子氏とエレン・ジョスペ氏の作品会場にて)

視察プログラムの最後は、サンジャンボンヌフォン市のエスパス・ヴォルテールで行われた高橋真紀氏の「JAPON : VOYAGE TEXTILE」展のヴェルニサージュでした。高橋氏御本人やサンジャンボンヌフォン市第一副市長、在リヨン領事事務所の江頭副領事ほか 50 名以上が出席したヴェルニサージュは、非常に和やかな雰囲気の中で実施され、来場者は日本のテキスタイルの美と日仏文化のハーモニーを楽しんでおられました。日本人アーティストの来訪を歓迎する地元市民との和やかな交流は夜更けまで続き、サンテティエンヌ市と在リヨン領事事務所の初めての共同企画が、こうして無事に終了しました。



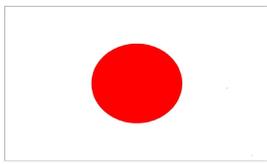
本事業のような先駆的な試みを快く受け入れ、共催者として篤く協力してくださったガエル・ペルドゥリオーサンテティエンヌ・メトロポール会長兼サンテティエンヌ市長、またサンテティエンヌ市関係者の皆様に、この場を借りて心から感謝申し上げます。



添付1 経済会議 « Rencontres économiques internationales - Les nouvelles formes de partenariats franco-japonais / 新たな日仏パートナーシップのあり方 » プログラム

添付2 在リヨン領事事務所長 小林龍一郎スピーチ原稿(日本語訳およびフランス語版)

添付3 パネリスト紹介資料



Bureau
Consulaire
du Japon
à Lyon

ville de
Saint-Étienne
L'expérience design

10^e
Biennale
Internationale
Design
Saint-Étienne

RENCONTRES ÉCONOMIQUES INTERNATIONALES

Les nouvelles formes de partenariats franco-japonais

Vendredi 24 mars à 11h00
Hôtel de Ville – Saint-Étienne
Salle Aristide Briand

| | |
|-------|--|
| 10h45 | <ul style="list-style-type: none">• Accueil des participants |
| 11h00 | <ul style="list-style-type: none">• M. Gaël PERDRIAU, Maire de Saint-Étienne et Président de Saint-Étienne Métropole <i>Ouverture officielle des rencontres économiques Internationales</i> |
| 11h05 | <ul style="list-style-type: none">• M. Ryuichiro KOBAYASHI, Consul, Chef du Bureau Consulaire du Japon à Lyon <i>Les relations économiques et culturelles franco-japonaises</i> |
| 11h15 | <ul style="list-style-type: none">• Mme Aya KITAHAMA, Conseil Japon, Direction Internationale, CCI de Lyon Métropole Saint-Étienne Roanne <i>Les différents modes d'approche du marché japonais</i>• Mme Miki KADOMOTO-BARRAT, Lyon Correspondent, JETRO Paris (Japan External Trade Organization) <i>L'accompagnement du JETRO sur les projets d'implantation au Japon</i> |
| 11h30 | <ul style="list-style-type: none">• Table ronde : «Les partenariats d'avenir franco-japonais» Modératrice : Mme Aya KITAHAMA, CCI de Lyon Métropole Saint-Étienne Roanne <p>M. Yutaka ISHIZUKA, gérant, DYSHOW INDUSTRIE SARL Fabricant de pièces industrielles, membre fondateur d'ACT «Alliance de compétences Technologiques»</p> <p>M. Alain SOWA, gérant, AS-MECA-BERNARD Fabricant dans le domaine de la mécanique de précision, membre fondateur d'ACT</p> <p>M. Gaëtan DUCULTY, gérant, SALAISONS DU MONT PILAT, MAISON DUCULTY Société d'agro alimentaire</p> <p>M. Yoichi KAI, Head of operations, PRIMETALS TECHNOLOGIES FRANCE SAS Fournisseur d'infrastructures, produits et services pour la métallurgie</p> |
| 12h10 | <ul style="list-style-type: none">• Échanges avec la salle |
| 12h30 | <ul style="list-style-type: none">• Buffet franco-japonais offert par le Bureau Consulaire du Japon à Lyon et la Ville de Saint-Étienne |

Conférence organisée en partenariat avec :



RENCONTRES ÉCONOMIQUES INTERNATIONALES :

Les nouvelles formes de partenariats franco-japonais

日仏経済会議「新たな日仏パートナーシップのあり方」

2016年3月24日 於サンテティエンヌ市庁舎

在リヨン領事事務所長 小林龍一郎 スピーチ

本日は、サンテティエンヌ市と共催のもと、由緒あるこの市庁舎で日仏経済会議を行う機会を得まして、非常に嬉しく思います。私に与えられたテーマは「日仏文化・経済関係について」です。経済交流の現場に関する話は、後半に予定されているラウンドテーブル・ディスカッションで、第一線で活躍される企業経営者の皆さんに大いに語っていただくとして、私からは、より大きな流れの中の日仏関係ということで総括的なお話をさせて頂きたいと思います。

公式には日仏外交関係は1858年に生まれました。その後、ユーラシア大陸の東にある小さな国日本は、明治維新を迎え近代化と国際化を果たし、二つの大戦の後、平和国家として歩みを進め高度経済成長時代を迎え、世界第二位の経済大国になりました。その間の日仏関係は、時代の流れの中で変化した部分と、本質的に変わらない部分の両面を持ちながらも、常に互いに補完しあう関係にあったと言えるでしょう。今日の会議では、過去と現代の実態を理解すると共に、50年先、いわば我々の子供や孫の時代の日仏関係まで目を向けていければ大変幸せに思います。

まずはサンテティエンヌ・メトロポールや在リヨン領事事務所が管轄するリヨン・メトロポールを含むオーベルニュ・ローヌ＝アルプ州（ARA）が、いかに日本と深い縁で結ばれているか、またその関係がEU圏内でもいかに突出しているかについて、歴史を紐解きながらお話させて頂きたいと思います。

まず日仏関係の黎明期ですが、徳川幕府時代の1855年にアルデッシュ地方でカイコの病が発生し、日本からカイコの卵が輸入されます。そのお陰でフランスの絹産業は復興し、日仏が絹産業を通じて強い絆を築いたこと、その「絹が結ぶ縁」が長い歴史を経て今日まで脈々と続いていることは皆さんもよく御存知だと思います。



江戸幕府が明治政府に代わってからも両国の交流は密に続き、明治政府はフランスの影響下、「殖産興業」「富国強兵」を掲げて、技術と法律の2分野で更に日仏交流を推し進めました。幕末から明治中期にかけてのフランス人「お雇い外国人」は通算 333 人に及びましたが、中でもその「お雇い外国人」の第一号とも言われているのが、サンテティエンヌ出身のフランソワ・コワニエであります。フランソワ・コワニエは、1867 年に訪日後、鉱業資源調査に携わりながら当時のフランスの先進技術の導入に大きく貢献しました。コワニエはほんの一例ですが、産業革命以降築いたフランスの英知が、とりわけ、サンテティエンヌ・メトロポールとリヨン・メトロポールの両地域が生んだ英知が日本の近代化の実現に大きく貢献したのです。

日本と ARA が、「絹が結ぶ縁」で結ばれていると先ほど申し上げましたが、その縁は、時代を経てハイテク繊維技術として現代に引き継がれます。

今日、日仏両国は技術大国として世界を牽引しています。日本もフランスも共に R&D を重視し、新素材やナノテクなど、世界が注目する分野で研究開発を進めて来ました。現代の日仏関係は、互いに技術供与や交流を通じて高めあう、二方向交流と言えることが出来ると思います。

2017 年 3 月現在の ARA 州の長期滞在邦人数は 3,562 人、日系企業数は 162 社* (*2016 年 10 月 1 日時点) となっており、いずれの数字も年々右肩上がりに増加しています。ARA 州はフランス国内でも成長拠点として、今非常に注目を浴びており、日仏企業にとっても今後様々なビジネスチャンスを提供していく有力な地域となって行くことが期待されています。

これまで駆け足で日仏両国関係の黎明期、そして現代の関係を見てまいりましたが、最後に、日仏関係の未来に目を転じたいと思います。

今後、日仏両国には、より大きな、地球規模の問題や課題――例えば、アフリカの飢餓や感染症など、人類全体にとっての課題に、ビジョンと情熱をもって共同で取り組むリーダーシップが求められるでしょう。これから日仏が共に歩み、紡ぎ出して行く物語は、長く、未知のストーリーです。道中は長く、今日ここですぐに結論を出すことは出来ません。これから未来に向かって長いヴォヤージュに乗り出す、今日はその第一歩なのです。言い方を変えれば、日仏関係の未来において主人公となるのは、ここに御出席の皆さん一人ひとりです。今日は、地元サンテティエンヌ・メトロポールの仏企業だけでなく、日系企業関係者にも出席頂いております。是非、皆様同士活発な交流があり、個々の出会いが将



来、美しい実を結ぶことを願っています。

最後に、今日の会議を経て、日本人と、じゃあ一つ一緒にやってみようかな、と言われる気になられた方、多くおられることを期待しておりますが、そういう方に、日本人とはどういう国民かというお話を一言申し上げたいと思います。日本との関係をこれから強化していくことをお考えの皆様にとって、日本人との付き合い方のささやかなヒントになれば幸いです。

細部・詳細への徹底したこだわり、ベストソリューションが見つかるまで絶対に諦めない粘り強さ、まじめな勤勉さ・・・これらは全て日本人の性格を表す言葉ですが、今日、日本がR&D、イノベーションの分野で世界一を誇るのも、長い歴史の中で培われてきた日本人のDNA、日本独自の文化・メンタリティーのお陰です。日本には、フランスに次いで優れた科学者が多く輩出されています。ノーベル賞受賞者で言えば、日本は2000年以降17名の自然科学分野でのノーベル賞受賞者が生まれ、これはアメリカに次いで世界第2位で、アジアではこれに並ぶ国はありません。

具体的な例として、2014年に赤崎勇氏と天野浩氏が、青色に光る発光ダイオード(LED)の発明でノーベル物理学賞を受賞したことは皆さんも御存知だと思います。「20世紀は白熱灯が照らし、21世紀はLEDが照らす」とも表現されたこの大発明は、まさに日本人の粘り強さ、こだわりのお陰で成し得た偉業と言うことが出来るでしょう。LEDは今日、世界中で、屋内の照明のみならず公共空間の照明、信号機等あらゆる場所に取り入れられ、CO2削減を通じて地球環境保護に大きく貢献しています。パリのエッフェル塔の照明2万個が、全てLEDに変えられたことも、皆さんの記憶に新しいかと思います。

日仏の未来について、さらなる持論の展開となりますが、私はこう考えます。日本人とフランス人はほどよく相反しており、ほどよく補完的な関係にある。ここにも多くおられる日仏カップルを見ておりますと、そういうことをふと、想起させられます。私は、日本人とフランス人のそれぞれの長所、得意な分野を重ね合わせることで、1+1が2ではなく、1+1が3にも4にもなる、他に例をみない優れた結果を生む可能性があることを申し上げたいです。私は、フランス人に日本人を説明するのに、3つのPを用います。そして外交官人生の半分以上を共に過ごした、愛すべきフランス人のことを日本人に説明するのに、私は、O・N・Sだとしばしば述べます。これはそれぞれの特徴をよく示していると思います。3つのPとは、礼儀正しさ (la Politesse)、清潔 (la Propreté)、そしてもう一つのPはおわかりでしょうか。時間厳守 (la Ponctualité) です。これは日本人の勤勉さの元であり、武士道と



ville de
Saint-Étienne
L'expérience design

Cité
du
design
Saint-Etienne
◀▶

いった長い間日本人を規定してきた考え方の基本にあるもので、これらの言葉の背景にあるのは、他者を重んじる気持ちです。礼儀正しさはまさに文字通り。清潔さは、相手を不愉快にさせまいとする他人への配慮、そして時間厳守は相手の時間を盗まないということ、相手への尊重、であります。さて、フランス人を理解するためのキーワードONSですが、これはなんでしょう。Office National des Statistiquesではありません。OはOriginalité、NはNaturel、そしてSはなんでしょう？Sは、Simplicitéだと思います。これは、フランス人の考え方や生活様式（mode de vie）を構成している考え方であると自分は考えています。もちろん異論があることは認めますが。この要素をバランス良く組み合わせることで、日仏の優れた部分がより強調され、人類の新技术、つまり、グリッドコンピューティング、IoT、ナノソーラエネルギー、メカトロニクス、再生医療、スーパーコンピューター、人工知能、ロボット等々といった人類の新分野において、世界のどこの国の組み合わせでも存在し得なかったような新しい発想や試みで人類の未来を開拓して行く時代を招くことができるのではないのでしょうか。

このあとのラウンドテーブル・ディスカッションでは、日仏の企業代表者の方から、現場で発生する様々な問題点や留意事項、そして成功経験や企業経営のつぼについて興味深いお話が聞けることでしょう。熱い議論を期待しております。カンファレンスで知性を十分に働かせて頂いた後は、日本とフランスの料理と日本酒、ワインを、感性で存分に味わって頂きたいと思います。このレセプションも、日本とフランスのコラボレーションです。

2018年には、日仏友好160周年を記念して、「ジャポニスム2018」がフランス各地で開催される予定ですが、本日の日仏交流イベントは、その先駆けと言っても過言ではありません。このような先駆的な試みを快く受け入れ、共催者として篤く協力してくださった、ガエル・ペルドゥリオール サンテティエンヌ・メトロポール会長兼サンテティエンヌ市長、またサンテティエンヌ市関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

御清聴ありがとうございました。



RENCONTRES ÉCONOMIQUES INTERNATIONALES :

Les nouvelles formes de partenariats franco-japonais

Vendredi 24 mars 2017

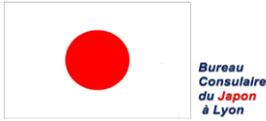
Hôtel de Ville – Saint-Etienne

**Discours de M. Ryuichiro KOBAYASHI, Consul,
Chef du Bureau Consulaire du Japon à Lyon**

Je suis extrêmement heureux de vous accueillir aujourd'hui aux Rencontres économiques internationales organisées en coopération avec la ville de Saint-Étienne, dans ces locaux riches d'histoire. Le thème que je vais aborder est celui des relations économiques et culturelles franco-japonaises. Je laisserai les dirigeants d'entreprise vous conter leurs témoignages sur les échanges économiques lors de la table ronde prévue en seconde partie, et je vous parlerai pour ma part de manière plus générale des grandes étapes des relations franco-japonaises dans l'histoire.

Officiellement, les relations diplomatiques entre la France et le Japon ont débuté en 1858. Puis le Japon, ce petit pays situé à l'est du continent eurasiatique, connut la Restauration de Meiji, accompagnée d'une ouverture vers l'international et d'une intense modernisation. Après les deux grandes guerres mondiales, le Japon devint un pays pacifiste et connut une période de forte croissance économique, pour devenir la deuxième puissance économique mondiale. Durant ces différentes périodes de l'histoire, nos deux pays connurent des relations différentes, tout en gardant constamment une certaine complémentarité.

Aujourd'hui, je serais très heureux si vous pouviez tourner les yeux vers l'avenir des relations franco-japonaises dans les 50 prochaines années, à l'époque de nos enfants et de nos petits-enfants, après un tour d'horizon sur le passé et le présent.



Tout d'abord, j'aimerais vous parler des liens profonds existant entre le Japon et la région Auvergne-Rhône-Alpes (ARA), où se trouvent Saint-Etienne, Lyon et notre bureau consulaire. Dans toute l'Union Européenne, il est peu de régions aussi étroitement liées au Japon, et vous verrez que l'histoire a joué un rôle important.

En 1855, lorsque le Japon était encore sous le règne des shôguns Tokugawa, une épidémie ravagea les élevages de vers à soie en Ardèche. Des œufs de vers à soie japonais furent alors importés du Japon, ce qui permit la reconstruction de l'industrie de la soie en France. Dès lors, des liens se tissèrent entre nos deux pays autour de cette industrie commune, et, comme vous le savez tous, ces liens de la soie perdurent toujours.

Les échanges continuèrent après la Restauration de Meiji, et sous l'influence française, le nouveau gouvernement de Meiji prit résolument la voie de l'industrialisation et du renforcement des forces armées, continuant à promouvoir les échanges franco-japonais en particulier dans les domaines de la technologie et de la législation. Depuis la fin du shôgunat jusqu'au début du 20^{ème} siècle environ, on compte 333 ingénieurs français engagés par le gouvernement japonais comme conseillers étrangers. Le premier d'entre eux fut François COIGNET, originaire de Saint-Etienne. François Coignet fut engagé en 1867 par l'état japonais pour diriger une étude sur les ressources minières, et contribua largement à l'importation des nouvelles technologies au Japon. Il y eut de nombreux autres ingénieurs comme M. Coignet, et c'est ainsi que le savoir-faire industriel français, en particulier de Saint-Etienne et de Lyon, a contribué à la modernisation du Japon.

Comme je vous le disais tout à l'heure, le Japon et la région Auvergne-Rhône-Alpes sont unis par les liens de la soie. Ces liens perdurent aujourd'hui dans les technologies des fibres textiles.

Dans le monde d'aujourd'hui, le Japon et la France sont deux pays leader dans le domaine de la technologie. Tous deux accordent une grande importance à la recherche-développement dans des domaines tels que les nouveaux matériaux ou les nanotechnologies qui attirent l'intérêt du monde entier. Aujourd'hui, on peut dire que les relations franco-japonaises sont basées sur la coopération et les échanges technologiques, dans le but de faire avancer la connaissance humaine, et dans ce sens-là, qu'elles sont bilatérales.



Actuellement, en mars 2017, le nombre de ressortissants japonais en séjour de longue durée dans la région ARA est de 3562 personnes, le nombre d'entreprises japonaises est de 162 (au 1^{er} octobre 2016), et ces deux chiffres ne cessent d'augmenter d'année en année.

La région ARA se distingue des autres régions françaises par sa forte croissance, et l'on peut espérer qu'elle devienne une terre d'opportunités pour les entreprises franco-japonaises.

Jusqu'ici, j'ai brossé un tableau rapide de l'histoire des relations entre nos deux pays et de la situation actuelle. Je souhaiterais maintenant évoquer l'avenir de nos relations.

A l'avenir, la France et le Japon devront faire preuve davantage de leadership et de coopération afin de s'attaquer avec passion et clairvoyance à des problèmes d'ordre mondial, tels que la famine sur le continent africain ou les nouvelles maladies infectieuses. L'aventure que nos deux pays vont vivre est longue et inconnue, et je ne suis pas en mesure de vous la raconter maintenant. Mais ce qui est certain, c'est que nous autres, ici présents, avons déjà fait le premier pas de ce long voyage. Vous êtes les personnages principaux de l'avenir de nos deux pays. Je souhaite de tout cœur que des liens puissent se tisser entre les entreprises françaises et japonaises présentes dans cette salle, et que les rencontres d'aujourd'hui portent des fruits à l'avenir.

Pour ceux qui, à la fin de cette conférence, auront envie de se lancer dans une aventure commune avec les Japonais – et j'espère qu'ils seront nombreux – je voudrais vous expliquer notre peuple en quelques mots. J'espère que cela vous sera utile pour mieux appréhender mes compatriotes.

Un souci absolu du détail, une persévérance à toute épreuve, un sérieux sans égal ... Voici quelques mots pour qualifier le peuple japonais, et je pense que si, dans le monde d'aujourd'hui, le Japon est parmi les meilleurs en termes d'innovation et de recherche-développement, ceci est dû certainement à la culture, à la mentalité, à l'ADN japonais qui ont été forgés par notre longue histoire. Ceci expliquerait aussi pourquoi le Japon compte autant de scientifiques compétents après la France. A titre d'exemple, le Japon compte 17 lauréats du Prix Nobel dans le domaine des sciences naturelles depuis l'an 2000, ce qui le place en 2^{ème} position après les Etats-Unis, et en 1^{ère} position en Asie.



Un exemple concret est le prix Nobel de physique, attribué en 2014 aux chercheurs japonais Isamu AKASAKI et Hiroshi AMANO pour leur invention de la diode électroluminescente (LED) bleue, dont vous avez certainement entendu parlé. Cette invention révolutionnaire, dont on dit que : « Le 20^{ème} siècle était éclairé par des lampes à incandescence, le 21^{ème} siècle le sera par des diodes LED. », est la preuve même de la persévérance des Japonais. Actuellement, les LED sont utilisées dans le monde entier pour les éclairages intérieurs, extérieurs, les espaces publics, les feux de signalisation, etc. Elles ont permis de diminuer de manière significative les émissions de CO2, et contribuent ainsi à la protection de l'environnement. Vous vous souvenez sûrement des 20,000 lampes de la Tour Eiffel qui ont été changées en LED récemment.

Maintenant, je souhaite vous faire part de ma vision personnelle de l'avenir de nos deux pays. Je pense que les Japonais et les Français ont une nature plutôt opposée, mais qu'ils se complètent plus ou moins, et d'ailleurs je remarque qu'il y a dans cette salle beaucoup de couples franco-japonais. En associant leurs qualités et leurs compétences, Japonais et Français peuvent faire en sorte que Un Plus Un égale non pas Deux, mais 3 voire même 4. Quand je décris les Japonais aux Français, je leur parle des 3 P. Et lorsque je décris à mes compatriotes les caractéristiques des Français, pour lesquels je porte une énorme affection, ayant passé la plus grande partie de ma vie de diplomate avec eux, je leur parle de O, N, S. Je pense que cela décrit bien les caractères des uns et des autres. Les 3 P des Japonais sont : Politesse, Propreté, et devinez quel est le troisième P ? C'est la Ponctualité. Ces trois P sont la base même du caractère travailleur des japonais, et à la base de la pensée du Bushidô qui a longtemps gouverné les Japonais. Ce qui se cache au fond de ces trois P, c'est le respect d'autrui. Pour la politesse, c'est facile à comprendre. Mais en quoi la propreté est-elle liée au respect d'autrui ? Parce que la propreté permet d'éviter les sentiments de désagrément aux autres. Et la ponctualité ? Parce qu'en étant ponctuel, on ne vole pas le temps de l'autre, on respecte son temps.

D'autre part, qu'est-ce que le O, N, S caractérisant les Français? Ce n'est pas l'Office National des Statistiques, non. C'est O pour Originalité, N pour Naturel, et le S ? S pour Simplicité. A mon avis, ces qualités sont la base de la pensée et du mode de vie français. Bien entendu, j'admets que vous puissiez ne pas être d'accord. Mais pour ma part, je pense que nous pouvons combiner les qualités respectives des Français et des Japonais de manière équilibrée, et mettre en valeur le meilleur des uns et des autres. C'est de cette façon-là que nous pourrons continuer à collaborer en tant que pionniers de l'humanité, avec des idées et des expérimentations nouvelles, dans des



domaines de pointe tels que les grilles informatiques, l'IdO (internet des objets), les nanotechnologies dans l'exploitation de l'énergie solaire, la mécatronique, la médecine régénérative, les superordinateurs, l'intelligence artificielle, les robots, etc.

Durant la table ronde qui suivra, des représentants d'entreprises françaises et japonaises apporteront leurs témoignages sur les problèmes concrets rencontrés en entreprise, les précautions à prendre, les réussites et les secrets de la gestion d'entreprise. J'attends de leur part un échange passionnant. Puis, une fois que vous aurez fait travailler votre intelligence en écoutant cette conférence, nous vous inviterons à faire travailler vos sens en dégustant la cuisine française et japonaise, du saké et du vin. Cette réception est aussi un exemple de la collaboration franco-japonaise.

L'année 2018 sera l'année du « Japonisme 2018 » dans toutes les grandes villes de France, en commémoration des 160 ans de relations amicales franco-japonaises. Il n'est pas exagéré de situer l'évènement d'aujourd'hui dans ce cadre-là, en tant qu'évènement précurseur de l'année du Japon en France. Je souhaite exprimer ma très vive reconnaissance à M. Gaël PERDRIAU, Maire de Saint-Etienne et Président de Saint-Etienne Métropole, et à toutes les personnes de la ville de Saint-Etienne qui ont participé à l'organisation de cet évènement, pour l'enthousiasme avec laquelle ils ont accueilli cette première, et pour leur très précieuse collaboration.

Je vous remercie de votre attention.

RENCONTRES ÉCONOMIQUES INTERNATIONALES :

Les nouvelles formes de partenariats franco-japonais

PARTICIPANTS

Dyshow Industrie SARL

M. Yutaka ISHIZUKA, Gérant

fondateur-membre d'ACT « Alliance de Compétences Technologiques »



La société Dyshow Industrie, fondée en mars 2016 à Saint Etienne, fabrique des pièces industrielles pour prototypes et petites séries. Elle propose également un service de support au développement, de dessin CAO, etc. Ses valeurs essentielles sont la qualité au standard japonais, la haute précision et la rapidité dans les délais.

Grâce à ses réseaux en France et au Japon, elle vous permet de bénéficier du savoir-faire des deux pays. La maison mère est une PME japonaise spécialisée dans l'usinage depuis 50 ans. Elle a choisi l'Europe, et en particulier la France, pour sa longue tradition industrielle, dans le but de développer de nouveaux marchés dans le domaine des pièces spécialisées. La société française est basée dans les locaux d'AS-MECA BERNARD, avec laquelle elle a bâti un partenariat, et utilise les équipements pour l'usinage de ses pièces.

C'est la première fois qu'une PME japonaise relève le défi de s'installer en France pour y faire de l'usinage. L'objectif de Dyshow est la production de nouvelles valeurs par la fusion des techniques françaises et japonaises.

AS-MECA-BERNARD

M. Alain SOWA, Gérant

fondateur-membre d'ACT « Alliance de Compétences Technologiques »



AS-MECA-BERNARD, réactive et imaginative, a été créée en 1996 du rapprochement de la société AS MECA, née en 1981 et de la société BERNARD, née en 1965. Cette nouvelle entité a acquis au fil des ans une solide expérience dans le domaine de la mécanique de précision. Des investissements dans les technologies du futur lui permettent de jouer un rôle au premier plan dans son secteur d'activité. Elle compte à ce jour 15 personnes et un C.A. d'environ 1.6M euros.

Ses secteurs d'activité sont l'armement, l'aéronautique, la marine, les travaux publics, les véhicules industriels, les installations nucléaires, l'agro-alimentaire, la fabrication d'installations cryogéniques et de turbo-machines. Cette entreprise se veut aujourd'hui réactive et imaginative, conduite par des femmes et des hommes responsables et motivés, offrant des prestations toujours plus fiables. Si l'entreprise a développé des relations privilégiées avec sa clientèle, c'est que la notion de service est entièrement inscrite dans ses gènes et que la satisfaction totale du client est un objectif incontournable.

ACT <http://www.actprecision.eu/fr/> depuis 2016

ACT est un groupement franco-japonais de quatre sociétés qui vise à répondre aux besoins de toutes les entreprises européennes et japonaises en matière de fabrication de pièces mécaniques de précision ainsi qu'en études et réalisation d'ensembles mécaniques.

ACT intervient dans le cadre de sous-traitance et pour les projets de fabrication de toutes sortes de pièces (pièce unitaire, petites et moyennes séries principalement). ACT propose également l'import/export de pièces de haute précision et des prestations de service (en consulting) pour les entreprises européennes vers l'Asie et vice-versa. ACT soutient les fabricants européens et japonais dans leur développement commercial et en matière d'échange technologique.

ACT regroupe quatre fabricants de pièces de haute précision. Chaque entreprise possède non seulement son savoir-faire en mécanique de précision, mais aussi sa spécificité sectorielle : aéronautique, automobile, énergie, industrie, médical, spatial, etc. ACT répond aux exigences de ses clients.

Salaisons du Mont Pilat (MAISON DUCULTY)

M. Gaëtan DUCULTY, Gérant



Charcutiers depuis 5 générations, la famille Duculty perpétue la fabrication traditionnelle du saucisson sec au cœur du Pilat en Rhône-Alpes. Charcutiers et salaisoniers depuis 1870, la famille Duculty a su transmettre, de père en fils, la fabrication authentique du saucisson sec, basée avant tout sur la qualité du porc, mais aussi et surtout sur une recette immuable et une qualité d'affinage exceptionnelle, grâce à l'air pur du Parc Régional du Pilat.

La Maison Duculty est une entreprise artisanale, qui perpétue un savoir-faire de maître artisan salaisonier. Guidée par l'authenticité, la tradition, la qualité, elle apporte la caution du label «Artisan», chargée de sens, à ses clients. Sensible à garantir la plus grande qualité pour ses produits la Maison Duculty a mis en place de manière volontaire, dès 1998, un plan de contrôle et d'auto-contrôle, assurant ainsi la garantie d'un saucisson "vrai" respectant, et la qualité, et la spécificité des produits de salaisons à l'ancienne, avec une fleur naturelle qui apporte au produit son goût unique et son caractère, signature de l'artisanat de qualité. Depuis 2016, la société s'est lancée dans la conquête du marché japonais.

Primetals Technologies France SAS
M. Yoichi KAI, Head of Operations



En janvier 2015, Mitsubishi-Hitachi Metals Machinery et Siemens VAI Metals Technologies ont mis leur savoir-faire en commun afin de créer une nouvelle société: Primetals Technologies. Par cette union, la nouvelle entité est devenue un partenaire de premier plan, innovateur et tourné vers l'avenir, avec une présence mondiale.

Primetals Technologies est un fournisseur complet de lignes de procédés sidérurgiques ; du matériau brut au produit fini. La société déploie tous les jours ses efforts afin de répondre aux besoins et aux défis toujours croissants des clients, en fournissant des technologies au standard mondial, des services sur tout le cycle de vie de l'usine et des équipements de fabrication supérieure.

Elle associe les technologies mécaniques sophistiquées et une expertise de pointe sur les systèmes de contrôle afin d'être leader sur le marché mondial. Sa vaste expertise dans la gestion de projets et la poursuite d'une synergie en tant que fournisseur intégré en mécanique et en électricité, sont les clefs de la qualité de ses services.

Elle soutient le développement de l'industrie métallurgique en fournissant aux clients des solutions industrielles innovantes, et des services basés sur son héritage technologique. Ceci est renforcé par un esprit d'entreprise favorisant l'innovation, la collaboration globale et la responsabilité.